



学校だより 神橋

令和元年 10月 31日
横浜市立神橋小学校

11月号

パプリカ

～自分自身への応援ソング～

校長 末松 隆一郎

晴れた日の優しい陽のぬくもり、冬を思わせる冷たい風……。いつしか秋は深まり、山粧う秋麗の頃となりました。先の台風19号では、未曾有の豪雨と暴風により、各地で甚大な被害がでてしまいました。避難生活を強いられている方々、冠水・浸水した街や家屋の片づけに追われる方々の様子が、数週間たった今でも連日報道されています。あらためまして、犠牲になられた方々に哀悼の意を表するとともに、被災された方々の生活が一日でも早くもとの日常に戻れることを、心よりお祈り申し上げます。

9月に開幕したラグビーワールドカップも、いよいよ大詰めを迎えようとしています。日本代表チームは、惜しくも4強入りは逃したものの、見事ベスト8となりました。試合後の選手達へのインタビューの中で、自国開催での盛り上がるの力、白と赤のジャージがスタンドを埋め尽くしての応援の力が、ベスト8躍進への大きな原動力となったという話を何人もの選手達が口にしていました。

「応援の力」 10月15日、前期終了にあたり、全校のみんなを応援する話で締めくくろうと考えている中で、一つの楽曲に辿り着き、終業式では以下のような話をしました。

この歌は、米津玄師さんが作詞・作曲をした、2020年東京オリンピック・パラリンピック公式応援ソング「パプリカ」です。でも、この曲を聴いていて不思議なことに気がつきました。それは、普通応援ソングというと「がんばれ」とか、「優勝目指して」とかいう言葉が入っているものなのですが、「パプリカ」にはそういう言葉は一切でてきません。また、曲の感じも、ゆずの「栄光の架け橋」とか、安室奈美恵さんの「HERO」とか、B'zの「ウルトラ・ソウル」のように勇ましかったり感動的なものが多いのに、「パプリカ」は、楽しい感じの曲ですね。どうしてかなあと思って調べてみると、そこには、この曲を作った米津玄師さんのこんな思いがありました。

米津さんは、東京オリンピック・パラリンピックの応援ソングを作ってほしいとお願いされた時に、「東京オリンピック・パラリンピックの時だけの応援ソングではなく、その後、次の時代を創っていく子ども達のための歌にしたい。だから、できた歌を歌うのは、自分ではなく子ども達に歌ってほしい。」と言ったそうです。では、だれを応援する歌なのか。それは、「誰か」ではなく、「自分自身」を応援する歌だそうです。

大きくなってくると、つらいことや大変なことがだんだんと増えてくる。そんな時は、ただ走り回っているだけで楽しかった無邪気な子どもの頃を思い出そう。「つらいことや大変なこともあるけれど、楽しいこともたくさんあるんだよ。優しい人も周りにはたくさんいるんだよ。だから、そんなことを思い出して、次に向かって頑張っていこう。」そんな思いが込められているそうです。

歌詞をみるとわかりますね。

「♪曲がりくねり はしゃいだ道 青葉の森で駆け回る 遊びまわり 日差しの町 誰かが呼んでいる」
「♪雨にくゆり 月はかげり 木かげで泣いていたのは誰 一人一人なぐさめるように 誰かか呼んでいる」
「よるこびを数えたら あなたでいっぱい 帰り道を照らしたのは 思い出のかけぼうし」とか。

「パプリカ」は、自分自身に元気なエネルギーをチャージする、そんな歌なんですね。

最後に米津さんの公式コメントの一部を紹介します。

「この曲を聴いた子ども達にとって、小さな世界を元気に生きていくための、^か糧になりますように。」

令和元年度も、折り返し点を過ぎました。まずは自分自身に元気をしっかりとチャージしながら、神橋小学校「ONE TEAM」で頑張っていきたいと思えます。

—追記—

前期終業式、体育館での式が終わって全校が退場する時に、5年生全員が全校のみんなを囲んで「パプリカ」の歌とダンスでみんなに「笑顔と元気」をプレゼントしてくれました。5年生(神橋坂88 と私は呼びたい)の皆さん、ありがとうございました。